

海外感染症流行情報 (2011年2月号)

東京医科大学病院 渡航者医療センター

・北半球で季節性インフルエンザの流行が拡大

日本では2月になりインフルエンザの流行がようやく沈静化しつつあります。厚生労働省の発表では、1月31日～2月6日までの定点医療機関からの報告数は28.9で、前週の31.9からやや減少しています。ウイルスの種類としてはH1H1型が多くみられます。

<https://hasseidoko.mhlw.go.jp/Hasseidoko/Levelmap/flu/index.html>

今季は国内で155万人がインフルエンザに感染していますが、その半数近くは20歳代以上の世代で、職場での予防対策が昨季に増して必要になっています。

世界的には北半球で流行が拡大していますが、米国や英国ではピークを越えた模様です (WHO Global Alert and Response 2011-1-28)。また香港では2月になりH1N1型の患者が急増しているとの情報もあります (香港衛生防護中心 2011-2-9)。

・鳥インフルエンザ H5N1 型の流行状況

国際獣疫事務局 (OIE) の報告によれば、2011年になり鳥の間で鳥インフルエンザ (H5N1型) の流行が発生している国はバングラデシュ、ミャンマー、カンボジア、香港、韓国などとなっています。これらの国では市場などで生きた家禽と接触しないように注意してください。なお、日本国内でも宮崎県や大分県などを中心に、H5N1型の鳥の間での流行が続いており、今後も警戒が必要です。

<http://www.oie.int/en/animal-health-in-the-world/web-portal-on-avian-influenza/about-ai/h5n1-timeline/>

H5N1型のヒトの患者は2011年になりエジプトで3名、カンボジアで1名発生しており、このうち1名が死亡しました (WHO Global Alert and Response 2011-2-9)。

・ハイチのコレラは高病原性の可能性あり

ハイチで2010年10月より発生していたコレラの流行は、ようやく沈静化の兆しがみられています (厚生労働省検疫所 2011-1-28)。患者数は1月中旬までに19万人に達しましたが、これは2009年に全世界で発生したコレラ患者数 (22万人) に匹敵するもの規模です。

なお今回の致死率は2.0%と通常のエルトール型に比べて高くなっています。この原因として、今回のハイチでの流行株が、バングラデシュから持ち込まれた病原性の高い株であるとの報告が米国の医学誌に発表されました (The New England Journal of Medicine 2011-1-6)。同国に滞在する際にはワクチンの接種か、抗菌薬によるスタンバイ治療 (薬を持参し発病したら服用する方法) などの対策が必要です。

・バングラデシュでニパウイルスの流行が発生

バングラデシュ北部で 1 月より原因不明の脳炎が流行していましたが、その原因がニパウイルスであることが判明しました。2 月上旬までに 24 名が死亡した模様です（Pro MED 2011-2-7）。

ニパウイルスは 1999 年にマレーシアで初めて発見された病原体で、ヒトに感染すると脳炎症状をおこします。その後、インドやバングラデシュでも流行していることが明らかになりました。この病原体はコウモリが保有しており、その排泄物などに接触すると感染がおこります。マレーシアではコウモリに接触した豚を介してヒトが感染しましたが、インドやバングラデシュではコウモリの排泄物に汚染された果物などから感染しています。また、病院内で患者から感染する事例もみられています。

日本人渡航者が感染するリスクは低いと考えますが、流行地域で果物を食べる際には表面をよく洗浄するなどの予防対策が必要です。

・日本の麻疹患者数が大幅に減少

国立感染症研究所の発表によると 2010 年の日本国内での麻疹患者数は 457 名となり、2008 年の 1 万人から大幅に減少しました。

<http://idsc.nih.gov/disease/measles/2010pdf/meas10-52.pdf>

日本では 2007 年に 10 歳代～20 歳代を中心に麻疹の流行がおこり、日本人海外渡航者が欧米諸国に輸出するという事例も発生しました。このため厚生労働省は 2008 年より麻疹患者の全数把握を行うとともに、ワクチンの 2 回接種を推進することで、麻疹対策を推進してきました。この結果、患者数の大幅な減少がみられたわけです。厚生労働省では 2012 年までに麻疹の国内からの根絶を目指しています。

なお、最近では海外滞在中に感染する輸入例も増えており、とくにアジア諸国での感染リスクが高いようです（共同通信 2011-2-12）。